

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	石川啄木「雲は天才である」と大正自由教育：一九二〇年代、「日本一の代用教員」の位置
Author(s)	出木, 良輔
Citation	国文学攷, 256 : 33 - 44
Issue Date	2024-06-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00055639
Right	本誌に掲載された論文等の著作権は、著者に帰属します。
Relation	



石川啄木 「雲は天才である」と大正自由教育

——一九二〇年代、「日本一の代用教員」の位置——

出 木 良 輔

はじめに

一九〇六年、石川啄木二〇歳の年に執筆・脱稿された小説「雲は天才である」(以下「雲」と略記)は、作者の没後刊行された『啄木全集 第一巻』(新潮社、一九一九年九月)によって初めて公にされた。執筆当時啄木が故郷岩手・洪民村の洪民尋常小学校に代用教員として奉職していたこと、そして同時期に著された「林中書」や「洪民日記」にもこの小説と類似した教育批判が見られることから、従来の研究の多くは啄木自身の理想や教育観を反映したテクストとして「雲」を論じてきた。

そのうち近年のものに目を向けよう。「林中書」などに見出される啄木の思想と「雲」を照合した林一晟は、「あくまで自己の置かれた状況によって生じる思想や感情」のみを描く点に同作の問題を見出す。すなわち「啄木自身が求めるものを、描くという行為をと

おして追求することで自己内解決へと向かっていく」のがこのテクストであり、その帰結として「『雲』の文学表象は啄木自身のうちに閉ざされることとなる」というのだ。^[1]このように、作中人物・新田耕助と啄木を同一視した上で、作品自体に否定的評価を与えてきたことに研究史の特徴があると言える。

またこれまでの研究においては、校歌をめぐる騒動を描く物語前半部と、石本俊吉の語りから成る後半部に統一性の欠如が見出され、そのことも否定的評価の根拠とされてきた。前後半の「分裂」を早くに問題化したのが久保田正文や小田切秀雄^[2]であり、小田切は「前半と後半とが、反世俗という主題で共通しているだけで」「一つの小説としての緊密な統一はつくられていない」と「雲」を断じている。作者啄木の視点が一貫性を欠いたことに「分裂」の原因を見出す池田功の論^[3]においても、「分裂」は基本的に作品自体への否定的評価の根拠とされてきた。

一方で米田利昭は登場人物の階層性に着目し、「分裂」説に異を唱える。前半部には教員間の階層構造（校長―正教員―女教員―代用教員）が、後半部には社会構造の下部に置かれた「底辺の窮民」石本が描かれることを米田は重視し、いずれにおいても下層化された存在の「反抗」が描かれると論じる。そしてそうであるがゆえに「この小説の前半と後半は連繋する。代用教員の反抗はこれを深めると社会の底辺からの反抗となるので、小田切らの指摘した（分裂）は杞憂なのだ」と米田は説く。

米田論のような例外を除けば、先行研究における「雲」の評価はおおむね否定的だと言って良い。先に触れた、新田耕助を啄木自身の「分身」（米田）や「自己表象」（林）として見ようとする論においては、新田（＝啄木）のナルシスティックな自己肯定の在り方も手厳しく批判されてきた。そのことを踏まえ、本稿では以下の観点から「雲」の再検討を行いたい。

第一に、新田耕助の自己語りの多面的なあり方に着目する。「雲」の物語は新田によって語られるが、新田自身の描かれ方は一貫して自己肯定的なものではない。新田が一步引いた位置から自身を批評的に形象しようとする志向を「雲」の記述からは認めることができ、さらには新田が意図しない形で自身を否定的に描出してしまいう場面も存在する。そのことを確認すると共に、「日本一の代用教員」という新田（＝啄木）の自称が持つ意味についても検討したい。

第二に考えたいのは、初出時すなわち『啄木全集』刊行の時代における「雲」の読まれ方である。従来、「雲」は執筆時（啄木の浪民尋常小学校勤務時代とも重なる一九〇六年前後）の史的状況との関わりを軸に論じられ評価されてきた。例えば先述の池田論は、新田の手がけた「校友歌」を明治期の唱歌・校歌と比較し、当時の国家主義思想から自由な点にその革新性と「大胆」さを確認する。池田論は、執筆当時の史的状況を背景化することで「雲」を再評価している点で重要である。

しかし本稿では、「雲」が先述の通り一九一九年以降、概して一九二〇年代に読者を得たテキストであることを何より重視したい。全集出版を契機として啄木作品の受容が進む一九二〇年代は、いわゆる大正デモクラシーを背景として「大正自由教育」ないし「大正新教育」と称される自由主義教育思想が隆盛を見せた時期でもあった。そこにおいて重視された教育観が新田耕助のそれとどのように重なり、どのようにずれているのか確認することで、「大正自由教育」の文脈において新田という一人の小学校教員がどのように評価可能か考えたい。

一九二〇年代はプロレタリア文学陣営による啄木評価が盛んに行われる時期でもあったが、同じ頃マルキシズムの隆盛を背景として文芸評価のパラダイムそれ自体が特異な様相を見せていたことも重要である。例えば一九二六年、教員経験者でもある駒越哲貞は啄木

と「雲」を「無産階級文学の先駆」と称し、以下のように述べる。⁽⁶⁾「四五年前あたりから頻りに世間で論議されたプロレタリアの文芸などいふものも、実は既に斯うして二十年も前に、啄木によつて、立派に先鞭をつけられたものであると云ふ事実⁽⁷⁾に想到するならば、彼が時代の先駆者であつた事は十分に首肯されるわけである」と。

これと似通つた評価は、啄木を「革命的詩人」として称揚する中野重治の啄木論⁽⁸⁾にも見出される。中野の論は啄木研究史にも大きな影響を与えたものとして位置づけられているが、短歌を中心化してきた啄木批評および研究の流れとは異なり、駒越がここで小説「雲」に着眼していること、さらには新田を啄木と重ねつつも、天野大助こそが「熱血詩人啄木の思想の代弁者」であり物語の「中心人物」だとするユニークな見方を提出していることは興味深い。「天野の如き人物が此世に居るならば、彼は本当に不幸な人々の為に、大いなる悩みを悩み、大いなる戦ひを戦つてくれる所の人類の救ひ手であり、統率者であるに違ひない。彼は弱者者、貧しき者、苦しめる者の眞の味方であるに違ひない」など、駒越は新田よりむしろ「世外の狂人」天野への敬愛の情を語る。

「雲」執筆当時、啄木が藤村や漱石への対抗意識を綴っていたことは有名だが、マルキシズムとプロレタリア文学の影響下で「階級」意識が高まる一九二〇年代の文脈に置かれたこのテキストは、執筆当時の作者の意図に留まりきらない意味を現象させてもいたのでは

ないだろうか。

先述の通り「雲」はこれまで一九〇六年前後の教育史的状況を背景に読まれており、発表時の文脈や受容の様相は考慮されてこなかった。そこで本稿では駒越という一人の同時代読者による評価を手がかりに、『啄木全集』刊行前後の同時代言説に即した形で同作の表現を検討してみたい。

以上の観点に基づき、「雲」の再読と再評価を行うことが本稿の狙いである。ただし、「雲」は単純に肯定的評価を下せるような作品ではなく、一九二〇年代の文脈を背景にしたときにこそその複雑さと問題性を浮上させるテキストだということをあらかじめ断つておく。

一、自己語りが呼び込むもの

「雲」は新田耕助の「筆」によつて記された手記、あるいは「六月三十日」の出来事を克明に記す日記の形式を取るテキストである。特にその前半部において新田はきわめて饒舌な語りを展開し、比喩表現を駆使しながら自身を含めた教員たちの姿を劇的に描き出す。まずはその中から、これまでの研究が批判的に評価してきた新田耕助の自己語りのあり方を確認しておく。

生徒の希望を容れて、といふよりは寧ろ自分の方が生徒以上に希望して開いたので、初等の英語と外国歴史の大体とを一

時間宛とは表面だけの事、実際は、自分の有つて居る一切の知識、(知識といつても無論貧少なものであるが、自分は、然し、自ら日本一の代用教員を以て任じて居る。)一切の不平、一切の経験、一切の思想、——つまり一切の精神が、この二時間のうちに、機を覗ひ時を待つて、吾が舌端より火箭となつて迸る。

引用したのは物語序盤、課外授業を行う新田の姿と内面を描く一節である。「日本一の代用教員」という撞着的な言い回しによる自任(自認)は「雲」を象徴するフレーズと言え、「月給八円の代用教員! 天下にこれ程名誉な事もあるまじく候」「余は日本一の代用教員である」といった「洪民日記」の記述とも重ねられることで、代用教員啄木のヒロイックな自意識と結びついた自己賛美とみなされてきた。

「日本一の代用教員」という新田のアイデンティティについては、啄木も熟慮の上推敲を行ったようである。「雲」の自筆原稿には、墨書で清書された本文の上に青鉛筆で書き込む形で本文の削除・修正が行われている箇所が全一三箇所存在する。これらはおそらく補稿時(一九〇六年一月)に行われたものと思われるのだが、その中から新田のアイデンティティに関わる削除箇所を二箇所見ておきたい。

まず、新田作の校歌を問題視した校長と首座訓導古山が「順序」

の重要性を語る場面。傍線部が初出本文では削除されている箇所である(以下同)。

『然し』と古山が繰り出す。此男然しが十八番だ。『その学校の生徒に歌はせるには矢張り校長さんなり、また私なりへ、一応其歌の意味でも話すとか、或は出来上つてから見せるとかしたら穏便で可いと、マア思はれるのですが。』

人を馬鹿にするにも程がある。人の創作の自由まで束縛する積りで居るのか。これでも吾輩は、耕助といふ本名こそ知らぬ人も多からうが、新田白牛と名告れば、天下に……………などと、深く蔵して置いた筈の自惚が胸の中に頭を擡げる。校長の口が動く、

『のみならず、学校の教案などは形式的で(後略)』

似たような本文削除が行われているのが、突如学校を訪れた石本俊吉の容貌を訝しんだ新田が、直後に「慚愧に堪へぬ悪徳であつた」とそれを悔いる場面である。この場面は原稿では「かくの如きさもしい事を、この詩人白牛、否日本一の代用教員たる自分の胸に感じたのは、実に慚愧に堪へぬ悪徳であつた」と記されている。

いずれの修正箇所からも、原稿執筆時点では新田に「新田白牛」(「詩人白牛」と「日本一の代用教員」の自意識が併存していたが、推敲によって後者の比重が大きくなっていることが分かる。このような推敲によって校長(「完全なる『教育』の模型」と新田(「日

本一の代用教員」の対比構造が成立していること、そしてそれにより反権力・反体制のポジションに立とうとする新田の狙いがより鮮明にされていることはいずれも見えやすい。

新田はこのように自身の下層性を強調し、それを校長や首座訓導の地位と対比する語りによって、反抗を「革命」として意味づけようとする。「暴力の権化なる巨獣」に相對した「完なき『無力』の選手」という自己表象や、「よし百人の職員があるにしても代用教員は常に末席を仰せ付かる性質のものであるのだ」などの自己言及が持つのも同様の性質である。代用教員新田は自身の下層性や「無力」をいわば逆用し、自らの正当化と特権化を繰り返し試みるのだ。

しかし同時に注意すべきは、そうした特権性を新田から剥奪するのもまた彼自身の語りであることだ。例えば先の課外授業の場面で、新田は「日本一の代用教員」を自称しつつも、教壇で雄弁に語られる自身の「知識」が「無論貧乏なものである」という断りを差し挟んでみている。この後の場面にも続けて記される新田の代言語が「貧乏な」「知識」から発せられるものに過ぎないことは、謙遜とも取れる形ではあれど初めから明示されているのだ。他にも「自分が日々の学校の門を出入する意義も、全くこの課外授業があるためであるらしい、」など、新田はこのテキストにおいてしばしば「自分」を對象化する記述を行っている。このように、新田耕助の自己語りは一貫してナルシスティックで肯定的なものとは言えず、自己から一

定の距離を取ろうという志向をそこに認めることもできる。

別の例として、新田を始めとする登場人物の身体描写に目を向けるとも良いだろう。例えば新田の「骨露はに瘦せた拳」は、彼が「俗吏」と呼ぶ視学官の「瘦犬の様な」外見とも重ねられている。それにより図らずも示唆されるのは、「日本一の代用教員」を自称する新田の外貌や経済的状況が所詮は「俗吏」のそれと大差ないものであることだ。こうした描写はさらに「肉は落ち骨は瘦せた壮烈なる人生の戦士」石本俊吉の容貌とも重ねられてゆくわけだが、新田自身の視点と語りから成るこのテキストが、他ならぬ新田自身を相對化してもいることをこれらの描写から見て取ることができるといえる。

饒舌な語りによって自らをヒロイックに表象しようとする新田の語りは一見すると一貫してナルシスティックなものに映るが、新田は語ることを通して自身の特権性を失ってもゆくのである。しかもそのことに対して無自覚な新田の姿を彼自身に語らせる「雲」は、校長や首座訓導だけでなく新田に対する読者の批判や嘲笑をも誘うテキストだったのではないだろうか。ここまで主にテキスト内在的な面から新田の人物像について考察してきたが、以下では発表時の社会的文脈にも目を向けてみたい。

二、児童不在の自由教育

一九二〇年代の日本で活発かつ多様な展開を見せた大正自由教育

運動は、旧来の画一主義・注入主義・暗記主義的な教育方法への批判と、児童中心的・自由主義的な教育の重視を特徴とする。この運動の革新性は、教育者だけでなく文学者や芸術家をも重要な担い手とした点にある。『現代の名作家』を数多く賛同者に加えた『赤い鳥』（一九一八年七月創刊）が「子供の純性を保全開発する」とを目標して様々な童話を世に出したことや、北原白秋や西條八十らが既存の文部省唱歌を批判的に意識しながら新しい童謡を模索したことはあまりに有名である。

唱歌批判の先鋒だった北原白秋は尋常小学校一年の唱歌「学校」を槍玉に挙げ、その「形式的な、而して非芸術的な」歌詞のあり方を問題化している。その上で白秋は、「一体に現在の教育は形式に囚はれ過ぎてゐる。因習と無理解と無趣味と、ただ文字や数理の上からばかりの教育、無理強ひの骨抜ききの修身、さうしたものが、事務的な日日の教案から色も香も無く生み出されてゆく。かうして真性の教育なるものが行はれる筈はないのである」と現今の公教育そのものへの批判を展開する。こうした記述からは、彼の批判対象が文部省唱歌ひいては現今の学校教育の「形式」主義的なあり方だったことがはっきりと見て取れよう。

物語前半部で多くの分量を割いて描かれる「校友歌」騒動は、「形式的」な「教案」や「教授細目」に縛られた形式主義的な学校教育の本質を捉えようとするものだったと理解できる。自作の「校友歌」

を切り口として「色々の順序の枝だの細目の葉だの」を徹底的に茶化し批判する新田の語りは、こうした公教育批判が激しく展開される一九二〇年代の教育思想と呼応するアクチュアルなものとして現象したはずである。

ただし、啄木自身が試みたとされる（公教育批判としての）児童中心の教育が新田によって実践されているとは言い難い。同じ場面で新田は、校長・首座訓導との問答を日露戦争になぞらえながら自らを勝者として描き出す。この勝利が周囲の人々の発言と偶発的な行動によって強引に演出されたものであることに注目しよう。具体的には女教師・山本孝子による擁護と、児童らの合唱・闖入を指すわけだが、特に問題なのは後者、児童による新田翼賛のあり方である。

新田の「無罪」宣言と女教師の擁護発言の後、教員室入口に六人の児童らが現れる。自身を見つめる児童らの瞬きを、新田は自らの勝利に対する「一種の暗号祝電」と自己都合で解釈する。その後さらに「一隊五人の健児」が合唱しながら教員室に行進し、退室後に「勝つた先生万歳」という「闖の声」を挙げる。それまで新田の「無罪」は彼一人が独善的に確信するに過ぎないものだったが、ここで児童たちが新田の勝利を断言することで新田の主張も補強されるのである。児童たちの行動は新田にとって予想外ではあれど、結果として理想的なものだった。

このテキストに描かれる児童たちは、新田によって「我がジヤコビン党员」ないし「革命の健児」と一括りにされ、新田の思想を特に忠実に体现する「輔や栄さんを除けば名を与えられることもない。彼らは新田にとって自身の目指す「革命」の徒に過ぎないのであり、脱個性化した児童を自己実現に用いるのが新田という教員なのだ。少なくともこのテキストにおいて、児童たちは新田と「同じ不快、不平」を共有した上で、新田が「敵」とみなす校長たちへの攻撃を代行する以上の役割を与えられていない。

このように考えたとき、新田が自作の歌詞の中で歌う「愛」の語は新田の姿と著しい不協和音を生じさせる。田中智志は、キリスト教に由来する概念である「愛」が「明治以降の日本の公教育に、おそらく大正期のそれに、新しい感情形式として浸潤し始め」たと説く⁽¹⁶⁾。田中によれば、この「愛」こそが「大正新教育思想の核心」をなす思想であったというのだ。

期せずして「愛」を歌う新田だが、大正自由教育を特徴づける児童中心主義・自由主義的な思想・心性や田中の言うような「愛」を彼から見出すことは難しい。新田の教育（特に課外授業）の背後に「生徒の希望」が一定程度あったとしても、その実質が自己実現にあったことは新田自身認めるところであり（「自分の方が生徒以上に希望して開いた」、新田が児童を慈しみ彼らによりそう姿をテキストは描いていないからだ。その極めつけは、「革命の健児」た

ちの手によって「門前に遊んで居る校長の子供の小さい頭に」「時ならぬ拳の雨」が降ることすら新田が愉快げに語ることだろう。新田の「愛」はせいぜい「自分と同じ不快、不平」を共有する（と彼自身が信じる）者のみ対象とするものであり、自己愛を超えるものではないのだ。

「雲」とほぼ同時期（一九〇六年前後）に執筆された島崎藤村「破戒」・夏目漱石「坊つちやん」の構造を分析した千田洋幸は、これら三作品に「ほぼ共通したイデオロギー」を見出している⁽¹⁷⁾。すなわちいずれの小説においても、主人公の教員が逸脱者・異分子として扱われると同時に、学校制度および学校の権力者を批判する被抑圧者としての役割を担っており、それによって被抑圧者⇨逸脱教員の側の正当性が強調されるというのだ。さらに教員たちの対生徒関係についても、「彼らにとって、生徒は教育の「対象」でしかなく、それゆえ両者の関係はつねに「われーそれ」的な関係にとどまらざるをえないのだ」と千田は述べる。

ここで付け加えるべきは、少なくとも新田にとって児童は「教育の「対象」」ですらないということだ。形式主義を批判し、教授細目を無視した自由奔放な「課外授業」を行う新田だが、テキストにおいて一連の実践は新田の自己実現と自己肯定にしか結びついていない。新田の行う「授業」に、教える対象としての児童は不在なのである。

北原白秋が批判したのは、「現在全国一般の小学校」で「児童の為の教育といふより、教師自身の生活の為名の為の教育、さうした事の為に児童の心身をかなりに虐待し損傷しつつそれを非理だとは少しも気がつかない」ような教育だった。ここで白秋が言う「児童の為の教育」すなわちあくまで児童を主体とし、児童の心身の涵養を行う教育は、大正期自由教育運動の中で芸術家・教育者双方によって目指されたものだった。⁽¹⁸⁾

「校友歌」騒動を通して新田が行おうとする形式主義への批判は、因らずも発表当時の教育史的状况とも重なっている。さらに「自主」と「愛」、「自由」の語に象徴されるヒューマニスティックないしデモクラティックな思想も、同じく大正自由教育に底流するものだったと言える。ただこうした思想を表面的に装いつつ、代用教員新田は自己実現と自己肯定に奔走する。

先述の通り、「日本一の代用教員」は代用教員啄木の自負ないし反骨精神を象徴する語として、作家論的な視点から素朴に解釈されてきた。しかし大正期の自由主義・児童中心主義の教育思想と言論を背景化したとき、「日本一の代用教員」という新田の自称はとりわけ空虚に響くのである。

三、「日本一の代用教員」、「ナポレオン」、「世外の狂人」

以上のような新田の浅薄さは、児童に対する態度だけでなく小

使・忠太への侮蔑的な扱い⁽¹⁹⁾からも見て取れよう。だがそれ以上に決定的な形で新田の問題性を明らかにするのが、物語後半部に登場する石本俊吉と天野大助である。石本や天野が置かれた状況の過酷さは、自らの下層性を強調する新田の自己語りを相対化し、彼の特権性を揺るがしてゆくことになる。

新田によって「ナポレオンの骸骨」と形容される石本の外貌が「悄然として塵塚の瘦犬」「肉は落ち骨は瘦せた壮烈なる人生の戦士」とも表現され、新田らの瘦身とも重ね合わされることになることは先述の通りである。石本のそうした「優秀なる風采と態度」に触れることで親密の情を（一方的に）強めた新田は、「旅順の大戦⁽²⁰⁾」で負傷した「敗残の軍人」に対して向けるものと「同じ意味に於ての痛切なる敬意」を彼に対し抱く。

右のように新田が露わにする素朴な軍人敬慕は大正期にどう受け入れられたのだろうか。よく知られるように、成田龍一は吉野作造の論文「民本主義鼓吹時代の回顧」（一九二八年）を参照した上で、大正デモクラシーを「帝国のデモクラシー」と形容している。⁽²¹⁾ すなわち大正デモクラシーおよびその立脚点となった大正期の民本主義は「日露戦争の熱狂性^{シヨレリスム}を背景に持ち、「帝国」の構造に規定されたナシヨナリズムと結合して現れ」たものであり、「内政的には自由主義を主張しているが、それが国権主義と結びつき、対外的には植民地領有や膨張主義などを容認」する点において帝国（主義）と地

続きのものだったというのだ。

一方で「自由」をうたいつつ、他方で強硬な「征服」を是とする新田の態度は、大正デモクラシーのこうしたあり方とも似通うものでもあろう。この点を見れば、軍人を素朴に理想化する新田の態度は一九二〇年代の言説状況にも容易にソフトランディングするものだったように映る。

一方で、石本を「ワートローの大戦」で負傷した軍人としてのナポレオンになぞらえる点はどうか。松本通孝によれば、戦前期歴史教科書においてフランス革命およびナポレオンに関する記述は常に大きな比重を占めていたという⁽²⁾。以下では松本の論を参照し、明治・大正期の学校教育におけるナポレオン像の変遷を簡単に確認しておく。

まず明治期教科書において、ナポレオンは対外戦争を展開した軍人として、あるいは国民の支持を得た為政者として表象される。特に一八八〇年代後半の「万国史教科書」は「ナポレオン礼讃の内容」を呈したという。一貫してナポレオンを英雄視する新田（あるいは少年期にナポレオンを崇拜した啄木）の視点にはこうした歴史教育の影を見ることができよう。

重要なのは、大正期以降そうしたナポレオン像が大きく変容することである。「偉人の壮行・事業及び当時の事情を詳にすること」を求める「中学校教授要目」改正（一九一一年）の影響か、ナポレ

オンの人物像や戦績に関する記述が詳細化したと松本は述べる。松本が参照していないものも含めて実際に大正期の歴史教科書を確認してみると、確かにナポレオンに関する記述は多い。そしてそうであるがゆえに、この時期の教科書にはナポレオンの内政への批判や彼の権勢の衰退までもが詳細に記されている⁽³⁾。大正期以降の教科書において、英雄としてのナポレオン像は影を潜めるのだ。要するに「雲」の受容が始まった一九二〇年代においてナポレオンはもはやそれまでのように単純に美化された英雄ではなかった。それゆえ石本をナポレオンになぞらえる新田の語りも的を射ないもの、あるいは前時代的なものとして受け取られた可能性が高いのである。

そもそも石本の語りが明らかにしてゆくのも、彼の実像がナポレオンという歴史上の「偉人」像と似ても似つかないものであることだ。兄妹を悲惨かつ理不尽な形で奪われるなど苦難に満ちた人生を歩んできた石本と英雄ナポレオンを重ねてしまうと、「労働と勉学の傍ら熱心に柔道を学んだ」労働者／苦学生としての石本の姿や、ハンディキャップを持って生まれた彼の階層性は見えづらくなってしまふ。新田は周囲の反対を顧みず石本を招き入れたことで自身が「疑ひもなく征服者の地位に立つて居る」と思い込むが、自らが招き入れた石本の語りによって新田の饒舌な語りの過剰さ、あるいは彼の滑稽さは浮き彫りにされてゆくのである。

それが特に分かりやすい形で行われるのが物語終盤、天野大助と

石本の出会いと別れを描く場面だろう。石本が明らかにする新田と天野の共通性、すなわち天野が（恐らくは小学校代用教員として）学校に奉職し「鯨髭の随分変態な高麗人」の校長と対立したという事実により、二人の対比構造が形作られていることは見えやすい。さらに石本は、天野が校長との衝突を経て免職され、にもかかわらず石本の境遇に寄り添い彼のために全財産を手放したこと、そして天野が「一文無し」で「遠い処」への出奔を決めたことなどを語る。石本が語る天野の自己犠牲的な姿は、彼と対照的に一貫して自己本位な新田の姿を浮かび上がらせるのである。

こうした天野の思想や態度は、かつて看守の職を経験したことにより形成されたものと設定される。天野は自身の社会観を以下のよう

に語っている。

鬼であるべき筈の囚人共が、政府の官吏として月給で生き剣をブラ下げた我々看守を、却つて鬼と呼んで居る。其筈だ、真の鬼が人間の作つた法律の網などに懸るものか。囚人には涙もある血もある、又よく物の味も解つて居る、実に立派な戦士だ、たゞ悲しいかな、一つも武器といふものを持つて居ない。世の中で美しい酒を飲んでる奴等は、金とか地位とか、皆それぞれに武器を持つて居るが、それを、その武器だけを持たなかつた許りに戦がまけて、立派な男が柿色の衣を着る。

ここで行われるのも新田と天野の差別化である。一貫して自身の

下層性を強調する戦略を取る新田と異なり、天野は権威の側に身を置いた経験を通して階級間の懸隔や不平等に対する理解を獲得しているのだから。下層社会の人々を「立派な戦士」と言い表し、社会との「戦闘」と「破壊」を促す天野のレトリックは「革命」の炎を煽る新田のそれと類似しているものの、社会的弱者に寄り添う天野の姿に一九二〇年代の読者が感銘を受けていたことは最初に確認した通りだ。大正期の思想と言論を背景に浮上した「弱き者、貧しき者、苦しめる者の眞の味方」という天野像は、天野の視点と振る舞いが新田のそれ以上に理想的なものとして現象したことの傍証となる。

「ナポレオンの骸骨」石本、あるいは「世外の狂人」天野の姿は、「日本一の代用教員」を自称する新田の語りの過剰さや滑稽さを、ひいては新田の自己賛美そのものの空虚さを露わにしてしまう。「雲」の物語は、前半部で新田が饒舌な語りを通して美化した自己像が結末に向かうにつれて瓦解してゆく様を描いているのであり、その意味で「分裂」することなく一貫した流れを持っていたと言える。

おわりに

大正期の言論と社会状況のありようは、一九一九年に発表された「雲」の読まれ方にも少なからず影響を与えたはずである。成田龍一は、日比谷焼討事件（一九〇五年九月）と米騒動（一九一八年

七（九月）という二つの騒擾に当時の民衆のエネルギーを見出し、それを大正デモクラシーの原動力として位置づけている。「雲」はこれらの騒擾を経た時期に読者を得ることとなったわけだが、大正デモクラシーや新たな学校教育のパラダイムは、階級や自由主義（教育）をめぐる思想を表層的にししか理解できない新田の姿を一層浮き彫りにしたのではないだろうか。

「形式」主義的な教育に対する新田の批判は、大正自由教育運動の中で展開された公教育批判とも一見呼応するように映る。一方で彼は「愛」や「自由」「自主」を表面上は高らかに歌いつつも、児童を始めとする弱者・他者を慈しむ姿勢を欠き、一貫して自己本位な姿のみ見せる。このように、饒舌な語りとは裏腹に浅薄な新田の姿を浮かび上がらせる表現は新田自身が語るテクストのところどころに明示的に配置されており、それらは必然的に新田への冷ややかなまなざしを呼び込むことになるだろう。冒頭で確認した駒越哲員の評における天野大助の理想化（社会的弱者の「眞の味方」）はその一つの帰結である。

よく知られるように、島崎藤村「破戒」（一九〇六年）について「破戒」は確かに群を抜いて居る。しかし天才ではない。革命の健児ではない」と啄木は述べた²⁾。教員を辞して「遠い処」へ旅立ってゆく天野の姿からも「破戒」の影響は明らかに見て取れるが、それ以上に発表時の社会状況によって「革命の健児」としての色彩を囚わらず

も色濃く与えられることとなったのが天野という人物像ではなかったか。

大正デモクラシーや大正自由教育が多様な形で展開するこの時期の社会と言論の状況を背景化した時に鮮やかに浮上するのが天野の理想性であり、新田という教員の問題性でもあった。理想化された啄木の自己表象にも見える新田耕助だが、他ならぬ新田の語りによって彼のエゴイステイックなあり方や帝国主義的な思考は浮き彫りにされる。「雲」の表象と語りは、「日本一の代用教員」を自称する新田のヒロイズムを瓦解させる可能性を沈潜させてもいたのである。

*引用は全て初出に拠る。引用に際してルビは省略し、傍点は全て私に付した。

注

- (1) 「自閉する文学表象―雲は天才である―」に語られる啄木の自我」（『日本文語と日本文学』二〇二二年八月）
- (2) 「解説」（『啄木小説集』春秋社、一九六五年九月）
- (3) 「解説」（『石川啄木全集 第三卷』筑摩書房、一九七八年一〇月）
- (4) 「啄木小説の世界の研究その1―雲は天才である―」の作品構造が示すものについて」（『明治大学大学院紀要 文学篇』一九八三年二月）
- (5) 「雲は天才である」（『解釈と鑑賞』一九八六年二月）
- (6) 「熱血詩人石川啄木（二）」（『新天地』一九二六年五月）。駒越は三重県第三中学校の英語教員を経て実業界に転身した人物で、一九二〇年代に『新天地』にしばしば筆を寄せている。

- (7) 「啄木に関する断片」(『驢馬』一九二六年一月)
- (8) 今井泰子「啄木研究五十年の歩み」(『岩城之徳編』石川啄木必携) 一九六七年二月、田口道昭「中野重治の啄木論」(『石川啄木論攷 青年・国家・自然主義』(和泉書院、二〇一七年一月) など参照。
- (9) 田口前掲書、特に第三部・第四部参照。
- (10) 「洪民日記」中の「八十日間の記」参照。
- (11) 伊ヶ崎暁生「形式でなく教育の精神で 石川啄木「雲は天才である」(『小説のなかの教師たち』明治・大正・昭和の作家たちが描く教育・教師観』みくに書房、一九八六年二月) など。
- (12) 「雲は天才である」原稿の閲覧に際しては、日本近代文学館の格別の配慮を賜りました。記して御礼申し上げます。併せて、日本近代文学館編『小説は書き直される―創作のバックヤード』秀明大学出版会、二〇一八年二月) 参照。
- (13) 橋本美保「大正新教育(日本の新教育)」(教育思想史学会編『教育思想事典 増補改訂版』勁草書房、二〇一七年九月)。併せて、中野光「自由教育運動の展開」(『大正自由教育の研究』黎明書房、一九九八年二月) も参照。
- (14) 「小学唱歌歌詞批判」(『芸術自由教育』一九二三年九月)
- (15) 荒川絃「教師・啄木と賢治 近代日本における「もうひとつの教育史」(新曜社、二〇一〇年六月) などに詳しい。
- (16) 「有島武郎の生長教育論」(橋本美保・田中智志編著『大正新教育の実践 交響する自由へ』東信堂、二〇二二年一月)
- (17) 「告白・教室・権力―『破戒』の構図―」(『読むという抗い 小説論の射程』溪水社、二〇二〇年九月)
- (18) 中野光前掲論参照。
- (19) 鈴木敏子も「お通し申せと自分は一喝を喰はした」といった形で見られ

- る新田の高圧的な態度に着目し、そこに作者啄木の「平等意識の欠如」を見出す。しかし新田のこうした振る舞いは作者の思想の単純な反映としてではなく、あくまで創作として捉えられるべきだろう。「雲は天才である」覚え書き」(『日本文学』一九七四年八月) 参照。
- (20) 原稿を見ると、この箇所は当初「奉天の大戦」と書かれていたことが分かる(その後、青鉛筆ではなく墨書で修正されている)。旅順攻略とその成功が日露戦争の報道の中でも特に華々しく報じられたトピックだった(その結果乃木希典の英雄化にも繋がった)ことを踏まえれば、「奉天の大戦」以上にナシヨナリズムを刺激する表現として「旅順の大戦」が選ばれたと考えることができる。
- (21) 『大正デモクラシー シリーズ日本近現代史④』(岩波書店、二〇〇七年四月) 特に第1章参照。
- (22) 「日本の歴史教科書におけるフランス革命・ナポレオンの位置づけ」(『専修大学歴史学研究センター年報』二〇〇六年三月)。松本はまた、明治期の中学校歴史教科書においてジャコバン独裁期が「恐嚇政治」の名称で、「悲惨」「兇暴」「残虐」などの修飾語を伴いながら記述されていたことを明らかにしている。新田は児童を「ジャコビン党」と称しているが、松本論を踏まえるならこの名称は執筆当時の文脈においても明らかにマイナスのイメージを付与するものだったと言える。
- (23) 近隣の他国民の反発を招いたことに加えて「驕傲専大專制」や重税によって自国民を苦しめたことを示す、「ナポレオンの全盛」「ナポレオンの衰退」「ウィーン会議」(滋賀員編『新訂中等西洋史』訂正四版、金港堂、一九二三年二月) が分かりやすい例である。
- (24) 注10に同じ。

―でき・りようすけ、名古屋女子大学・講師―